

## 第2章 敬語の仕組み（たたき台）

### 1 敬語の種類と、それぞれの機能 敬語には、次の各種がある。

#### (1) 尊敬語（「いらっしゃる」型）

相手側又は第三者の行為・ものごと・状態などについて、その人物を立てて述べるもの。

##### 【該当語例】

- 【行為等（動詞）】 いらっしゃる、おっしゃる、なさる、召し上がる  
お(ご)……になる、……(ら)れる
- 【ものごと等（名詞）】 お名前、御住所、お出掛け、御利用  
(立てるべき人物からの) お手紙、御説明
- 【状態等（形容詞など）】 お忙しい、御立派

##### 【解説1：行為についての尊敬語】

「先生は来週海外へいらっしゃるんですね。」と述べる場合、「先生は来週海外へ行くんですね。」と同じ内容であるが、「行く」の代わりに「いらっしゃる」を使うことで、「先生」を立てる述べ方になる。このように、「いらっしゃる」は<行為者>に対する敬語として機能する。この種の敬語は、一般に「尊敬語」と呼ばれている。

(注) 「いらっしゃる」には、「行く」意のほか「来る」「いる」意の用法もある。これらの意の「いらっしゃる」も尊敬語である。

##### 【解説2：ものごとや状態についての尊敬語】

「お名前」「お忙しい」のように、行為ではなく、ものごとや状態を表す語にも「尊敬語」と呼ばれるものがある。これらの場合は、ものごとの<所有者>や、その状態の人物を立てる機能を持つ。例えば「先生のお名前」は「名前」の<所有者>である「先生」を、また「先生はお忙しいようですね。」は「忙しい」状態にある「先生」を、それぞれ立てることになる。

##### 【解説3：立てられる人物について】

「先生は来週海外へいらっしゃるんですね。」(あるいは「先生のお名前」「先生はお忙しいようですね。」)と述べる場合には、次のような各場合がある。

- ① 「先生」に対して、直接このように述べる場合
- ② 「先生」の家族等に対して、このように述べる場合
- ③ その他の人(例えば友人等)に対して、このように述べる場合

尊敬語を使うことによって立てられる人物（上記の例の「先生」）は、①の場合は「話や文章の相手」、②の場合は「相手の側の人物」に当たる（①②の場合をまとめて、ここでは「相手側」と呼ぶことにする）。また、③の場合は「第三者」に当たる。以上のように、尊敬語は「相手側又は第三者」の行為・ものごと・状態などについての敬語である。

なお、立てられる人物（上記の例なら「先生」）が状況や文脈から明らかな場合には、それを言葉で表現せずに、ただ「来週海外へいらっしゃるんですね。」「お名前」「お忙しいようですね。」などと述べる場合もある。

#### [補足：「くださる」]

「くださる」の場合は、[解説1]で述べた一般の「尊敬語」の性質に加えて、「その行為者から恩恵が与えられる」という意味も併せて表す。例えば、「先生が指導してください。」「先生が御指導くださる。」は、それ（＝「先生が指導すること」）が有り難いことである、というとらえ方をしていることになる。

## (2) 謙譲語（「伺う」型）

相手側又は第三者に向かう行為・ものごとなどについて、その向かう先の人物を立てて述べるもの。

#### [該当語例]

[行為（動詞）] 伺う、申し上げる、お目に掛かる、差し上げる  
お（ご）……する

[ものごと等（名詞など）]（立てるべき人物への）お手紙、御説明

#### [解説1：行為についての謙譲語]

「先生のところに伺いたいんですが……。」と述べる場合、「先生のところに行きたいんですが（先生のところを訪ねたいんですが）……。」と同じ内容であるが、「行く（訪ねる）」の代わりに「伺う」を使うことで、「先生」を立てる述べ方になる。このように、「伺う」は〈向かう先〉に対する敬語として機能する。この種の敬語は、一般に「謙譲語」と呼ばれている。

(注) 「伺う」には、「行く（訪ねる）」意のほか「聞く」「尋ねる」意の用法もある。これらの意の「伺う」も謙譲語である。

#### [解説2：ものごと等についての謙譲語]

「先生へのお手紙」「先生への御説明」のように、行為ではなく、ものごと等を表す場合についても、〈向かう先〉を立てる「謙譲語」がある。

(注) ただし、「先生からのお手紙」「先生からの御説明」の場合は、〈行為者〉を立てる尊敬語である。このように、同じ形で、尊敬語としても謙譲語としても使われるものがある。

#### [解説3：立てられる人物について]

「先生のところに伺いたいんですが……。」（あるいは「先生へのお手紙」）などと述べる場合には、次のような各場合がある。

① 「先生」に対して、直接このように述べる場合

②「先生」の家族等に対して、このように述べる場合

③その他の人（例えば友人等）に対して、このように述べる場合

謙譲語を使うことによって立てられる人物（上記の例の「先生」）は、①の場合は「話や文章の相手」、②の場合は「相手の側の人物」に当たる（①②の場合をまとめて、ここでも「相手側」と呼ぶ）。また、③の場合は「第三者」に当たる。以上のように、謙譲語は、「相手側又は第三者」に向かう行為・ものごとなどについての敬語である。

なお、立てられる人物（上記の例なら「先生」）が状況や文脈から明らかな場合には、それを言葉で表現せずに、ただ「伺いたんですが……。」「お手紙」などと述べる場合もある。

[補足：「いただく」など]

「いただく」「お借りする」「いただきもの」などは、相手側又は第三者から受ける行為・ものごと等を、その出どころに当たる人物（行為者・提供者）を立てて述べる敬語である。ほかの謙譲語とは、行為やものごとの移動の向きが異なるが、敬語のタイプとしては同じ謙譲語だと考えられる。

なお、「いただく」の場合は、恩恵を受けるという意味も併せて表す。例えば、「先生に指導していただく。」「先生に御指導いただく。」は、それが有り難いことである、というとらえ方をしていることになる。

### (3) 丁重語（「参る」型）

自分側の行為・ものごとなどを、話や文章の相手に対して、丁重に述べるもの。

[該当語例]

[行為（動詞）] 参る、申す、いたす、おる

[ものごと（名詞）] 弊社、拙著

[解説1：丁重語とその典型的な用法]

「明日から海外へ参ります。」と述べる場合、「明日から海外へ行きます。」と同じ内容であるが、「行く」の代わりに「参る」を使うことで、話や文章の相手に対して、丁重に（改まって）述べることになる。このように、「参る」は<相手>に対する敬語として機能する。

この種の敬語は、これまで「丁重語」と呼ばれることもあった。「謙譲語」に含める考え方もあるが、ここでは、「謙譲語」と区別して、「丁重語」と呼ぶ。その理由は[補足ア]に述べる。

(注)「参る」には、「行く」意のほかに「来る」意の用法もある。この意の「参る」も丁重語である。

[解説2：「電車が参ります」 — 自分側の行為以外にも丁重語を使う場合 — ]

丁重語のうち、行為を表すもの（動詞）は、「私が参ります。」「息子が参ります。」のように自分側（自分あるいは自分の側の人物）の行為について使うのが普通ではあるが、「電車が参ります。」のように自分側以外の行為についても使う場合がある。

ただし、話や文章の相手や、その他立てるべき人物について、「(あなたは) どちらから参りましたか。」「先生は来週海外へ参ります。」などと使うのは不適切である。

[補足ア：(2)の「謙譲語」と(3)の「丁重語」との違い]

— <向かう先>に対する敬語と<相手>に対する敬語 — ]

(2)の「謙譲語」と(3)の「丁重語」は、類似している点もあるため、どちらも「謙譲語」と呼ばれる場合もあるが、(2)は<向かう先>に対する敬語、(3)は<相手>に対する敬語であり、性質が異なる。この点に関係して、次のような違いも持つ。これらは、謙譲語や丁重語を適切に使う上で重要な相違点である。

[ア-1：立てるのにふさわしい<向かう先>の有無についての違い]

(2)は<向かう先>に対する敬語であるため、立てるのにふさわしい<向かう先>がある場合に限って使う。例えば、「先生のところに伺います。」とは言えるが、「海外に伺います。」は不自然である。これは、前者では<向かう先>である「先生」が「立てるのにふさわしい」対象となるのに対し、後者の「海外」は「立てるのにふさわしい」対象とはならないためである。

一方、(3)は<相手>に対する敬語であるため、立てるのにふさわしい<向かう先>の有無にかかわらず使うことができる。例えば、「先生のところに参ります。」とも、「海外に参ります。」とも、言うことができる。

[ア-2：どちらも使える場合の、敬語としての機能の違い]

ふさわしい<向かう先>がある場合は、(2)を使って「先生のところに伺います。」のように述べることも、(3)を使って「先生のところに参ります。」のように述べることも、できることになる。

ただし、前者が「先生」に対する敬語であるのに対して、後者は話や文章の<相手>に対する敬語であることに注意したい。つまり、「先生」以外の人に対してこれらの文を述べる場合、「先生のところに参ります。」の方は、「先生」ではなく、<相手>に対する敬語として機能していることになる。(なお、「先生」に対してこれらの文を述べる場合には、「先生」=<相手>なので、結果としてどちらの文も同じように機能することになる。)

[ア-3：「ます」との関係についての違い]

(2)は、「ます」を伴わずに使うこともできる。例えば、「来週先生のところに伺う(よ)。」「先生」以外の人に述べたり、「先生のところに伺って、……」「先生のところに伺うとき、……」などと述べたりすることもできる。

一方、(3)は、一般に「ます」を伴って使う。例えば、「来週海外に参る。」と述べたり、文末以外であっても「海外に参って、……」「海外に参るとき、……」などと述べたりするのは、不自然である。

以上のような(2)と(3)の違いは、要するに、(2)は<向かう先>に対する敬語、(3)は<相手>に対する敬語であるという性質の違いに基づくものである。

(2)と(3)には以上のような違いがあるため、(2)を「謙譲語」、(3)を「丁重語」と呼んで、両者を区別することが重要である。

[補足イ：「お(ご)……いたす」 — (2)(3)両方の性質を併せ持つ敬語 — ]

[補足ア]で述べたように、(2)の「謙譲語」と(3)の「丁重語」とは異なるタイプの敬語であるが、その一方で、(2)(3)両方の性質を併せ持つ敬語として「お(ご)……いたす」がある。

「駅で先生をお待ちいたします。」と述べる場合、「駅で先生を待ちます。」と同じ内容であるが、「待つ」の代わりに「お待ちいたす」が使われている。これは、「お待ちする」の「する」を更に「いたす」に代えたものであり、「お待ちする（(2)の謙譲語）」と「いたす（(3)の丁重語）」の両方が使われていることになる。この場合、「お待ちする」の機能により、「待つ」の＜向かう先＞である「先生」を立てるとともに、「いたす」の機能により、話や文章の相手（「先生」である場合も、他の人物である場合もある。）に対して丁重に述べることになる。

つまり、「お（ご）……いたす」は、「自分側から相手側又は第三者に向かう行為について、その向かう先の人物を立てるとともに、話や文章の相手に対して、丁重に述べる」という機能を併せ持つ、謙譲語兼丁重語である。

(4) 丁寧語（「ます」「です」「(で) ございます」型）  
話や文章の相手に対して、丁寧に述べるもの。

[該当語]

ます、です、(で)ございます

[解説]

「テーブルの上に資料があります。」は「テーブルの上に資料がある。」と、また「次回は来月十日です。」は「次回は来月十日だ。」と、それぞれ同じ内容であるが、「ます」「です」を文末に付け加えることで、話や文章の相手に対して、軽い丁寧さを添えて述べることになる。

また、「テーブルの上に資料がございます。」は「テーブルの上に資料があります。」と、また「次回は来月十日でございます。」は「次回は来月十日です。」と、それぞれ同じ内容であるが、「ございます」を使うことで、話や文章の相手に対して特に丁寧に述べることになる。

このように、「ます」「です」や「(で) ございます」は、＜相手＞に対する敬語として機能する。述べる内容は自分側のことに限らず、この点で(3)よりも使用範囲が広い。(4)の「ます」「です」と「(で) ございます」は、丁寧さの度合いの違いを別にすれば、いずれもこのような共通点を持ち、一般に「丁寧語」と呼ばれている。

[補足：(3)の「丁重語」と(4)の「丁寧語」との違い]

(3)と(4)は、どちらも話や文章の相手に対する敬語である。主な違いは、(3)が主に自分側のことを述べる場合に使い、特に「話や文章の相手や、その他立てるべき人物」については使えない((3)の[解説2]を参照。)のに対し、(4)は広く様々な内容を述べるのに使えることである。

(5) 美化語（「お酒」型）

ものごとを、美化して述べるもの。

[該当語例]

お酒、……

[解説]

例えば、「お酒」は「酒」を美化して述べるものである。「お酒は百薬の長だと言うよ。」などと述べる場合の「お酒」は、(1)の「お名前」と違って<所有者>を立てるわけでも、(2)の「(立てるべき人物への)お手紙」とも違って<向かう先>を立てるわけでもない。また、(3)や(4)の敬語とも違って、<相手>に丁重に、あるいは丁寧に述べているということでもなく、要するに「ものごとを、美化して述べ」ているのだと見られる。

その意味で、(1)～(4)のような狭い意味での敬語とは性質の異なるものである。ただし、<所有者><向かう先><相手>などに配慮して(1)～(4)の敬語を使って述べるときには、その話や文章の中に、この「お酒」のような言い方が表れやすいと言える。この種の語は、一般に「美化語」と呼ばれている。

なお、この種の語には、むしろ「お」を付けて述べる方が自然なものから、付けない方が自然なものまで、いろいろな段階のものがあるだけでなく、男女差や個人差もかなり見られる。

## 2 敬語の形の作り方

各種の敬語形を作る上で留意すべき点には、主として次のような点がある。

### (1) 動詞の尊敬語・謙讓語などの形の作り方

#### ① 尊敬語の形

「行く→いらっしゃる」のように特定の語形（特定形）による場合と、「お（ご）……になる」（例、読む→お読みになる、利用する→御利用になる）のように広くいろいろな語に適用できる一般的な語形（一般形）を使う場合とがある。

#### [特定形の主な例]

- ・いらっしゃる（←行く・来る・いる）
- ・おっしゃる（←言う）
- ・なさる（←する）
- ・召し上がる（←食べる・飲む）
- ・下さる（←くれる）
- ・見える（←来る）

#### [一般形の主な例]

- ・お（ご）……になる（後掲【補足ア】参照）
- ・……（ら）れる（例：読む→読まれる、利用する→利用される、述べる→述べられる、食べる→食べられる）
- ・……なさる（例：利用する→利用なさる）  
（注）「……なさる」の形は、サ変動詞（「……する」の形をした動詞）についてのみ、その「する」を「なさる」に代えて作ることができる。
- ・ご……なさる（例：利用する→御利用なさる）  
（注）「ご……なさる」の形は、サ変動詞（「……する」の形をした動詞）についてのみ、「する」を「なさる」に代えるとともに「ご」を冠して作ることができる。ただし、「ご」がなじまない語については、作ることができない（後掲の【補足ア：「お（ご）……になる」を作る上での留意点】に準じる留意が必要である。
- ・……ていらっしゃる（例：読む→読んでいらっしゃる、利用する→利用していらっしゃる）
- ・お（ご）……だ（例：読む→お読みだ、利用する→御利用だ）  
（注1）「だ」を丁寧語「です」に変えた「お（ご）……です」の形で用いることが多い。  
（注2）「お（ご）……だ」「お（ご）……です」を作る上では、後掲の【補足ア：「お（ご）……になる」を作る上での留意点】に準じる留意が必要である。
- ・……てくださる（例：読む→読んでくださる、指導する→指導してくださる）
- ・お（ご）……くださる（例：読む→お読みくださる、指導する→御指導くださる）  
（注）「お（ご）……くださる」を作る上では、後掲の【補足ア：「お（ご）……になる」を作る上での留意点】に準じる留意が必要である。

#### [補足ア：「お（ご）……になる」を作る上での留意点]

「お（ご）……になる」を作る上で留意すべき点は次のとおり。

### [ア-1：「お」「ご」の使い分け]

一般に、動詞が和語の場合は「読む→お読みになる」「出掛ける→お出掛けになる」のように「お……になる」となり、漢語サ変動詞の場合は「利用する→御利用になる」「出席する→御出席になる」のように「ご……になる」となる。

### [ア-2：変則的な「お（ご）……になる」]

次の場合は、変則的な作り方となる。

- ・御覧になる（←見る）
- ・おいでになる（←行く・来る・いる）
- ・お休みになる（←寝る）
- ・お召しになる（←着る）

### [ア-3：「お（ご）……になる」が作れない場合]

慣習上、「お（ご）」と組み合わせることがなじまず、「お（ご）……になる」の形が作れない動詞もあるので、注意を要する。

例：×お死になる（→お亡くなりになる、亡くなられる）、×御失敗になる（→失敗なさる、失敗される）、×御運転になる（→運転なさる、運転される）

## ②謙譲語の形

「訪ねる→伺う」のように特定の語形（特定形）による場合と、「お（ご）……する」（例：届ける→お届けする、案内する→御案内する）のように広くいろいろな語に適用できる一般的な語形（一般形）を使う場合とがある。

### [特定形の主な例]

- ・伺う（←訪ねる・尋ねる・聞く）
- ・申し上げる（←言う）
- ・存じ上げる（←知る）
- ・差し上げる（←上げる）
- ・頂く（←もらう）
- ・お目に掛かる（←会う）
- ・お目に掛ける、御覧に入れる（←見せる）
- ・拝見する（←見る）
- ・拝借する（←借りる）

### [一般形の主な例]

- ・お（ご）……する（後掲【補足イ】参照）
- ・お（ご）……申し上げる（後掲【補足イ】参照）
- ・……ていただく（例：読む→読んでいただく、指導する→指導していただく）
- ・お（ご）……いただく（例：読む→お読みいただく、指導する→御指導いただく）

（注）「お（ご）……いただく」を作る上では、前掲の【補足ア：「お（ご）……になる」を作る上での留意点】に準じる留意が必要である。



[補足イ：「お（ご）……する」「お（ご）……申し上げる」を作る上での留意点]

「お（ご）……する」「お（ご）……申し上げる」を作る上で留意すべき点は、次のとおり。

[イ-1：「お（ご）……する」「お（ご）……申し上げる」が作れるための基本的条件]

これらの語は＜向かう先＞を立てる謙譲語なので、＜向かう先＞の人物がある動詞に限って、これらの形を作ることができる。例えば「届ける」や「案内する」は＜向かう先＞の人物があるので、「お届けする（お届け申し上げる）」「御案内する（御案内申し上げる）」という形を作ることができるが、例えば「乗る」や「帰宅する」は＜向かう先＞の人物が想定できないので、「お乗りする（お乗り申し上げる）」「御帰宅する（御帰宅申し上げる）」という形を作ることにはできない。

なお、＜向かう先＞の人物があっても、例えば「お懂れする（お懂れ申し上げる）」「御賛成する（御賛成申し上げる）」とは使わない。というように、慣習上「お（ご）……する」「お（ご）……申し上げる」の形が作れない場合もある。

[イ-2：「お」「ご」の使い分け]

一般に、動詞が和語の場合は「届ける→お届けする」「誘う→お誘いする」のように「お……する」となり、漢語サ変動詞の場合は「案内する→御案内する（御案内申し上げる）」「説明する→御説明する（御説明申し上げる）」のように「ご……する」となる。

### ③ 丁重語の形

「まいる」などの幾つかの特定の語形のほかには、一般的な語形としては「……いたす」があるだけである。

[特定形]

- ・ 参る（←行く・来る）
- ・ 申す（←言う）
- ・ いたす（←する）
- ・ おる（←いる）
- ・ 頂く（←食べる）

[一般形]

- ・ ……いたす（例、利用する→利用いたす）

（注）「……いたす」は「……する」の形をした動詞（サ変動詞）のみに適用可能。

### ④ 謙譲語兼丁重語の形

一般的な語形として「お（ご）……いたす」がある。

## (2) 「お」と「ご」の使い分け

動詞の尊敬語の形「お(ご)……なさる」「お(ご)……くださる」、謙讓語の形「お(ご)……する」、謙讓語兼丁寧語の形「お(ご)……いたす」、名詞・形容詞などの各種敬語形「お名前」「御住所」「お忙しい」「御立派」などにおける「お」「ご」の使い分けは、「お+和語」「ご+漢語」が原則である。ただし、美化語の場合は、「お化粧」「お料理」など、漢語の前でも「お」が好まれる。また、美化語の場合以外にも、「お加減」「お元気」(いずれも尊敬語で、「お+漢語」の例)など、変則的な場合もあるので注意を要する。

## (3) 可能の意を添える場合

動詞に可能の意を添えて、かつ敬語にするには、まず敬語の形にした上で可能の形にする。

### ① 尊敬語の場合

例：召し上がれる・お読みになれる・御利用になれる(まず、「召し上がる」「お読みになる」「御利用になる」の形にした上で、可能の形にする。)

### ② 謙讓語の場合

例：伺える・お届けできる・御報告できる(まず、「伺う」「お届けする」「御報告する」の形にした上で、可能の形にする。後二者の場合、「する」を「できる」に変えることで、可能の形になる)

(注) このように、「お(ご)……できる」は、謙讓語「お(ご)……する」の可能形である。この形を尊敬語の可能形として使う「御利用できる」「お買い求めできる」などは、適切ではない。

### ③ 丁寧語の場合

例：参れる(まず、「参る」の形にした上で、可能の形にする。例えば、「申し訳ありません。明日は参れません。」などと使う。)

## (4) 「二重敬語」とその適否

一つの語に、同じ種類の敬語を二重に使ったものを「二重敬語」という。例えば、「お読みになられる」は、「読む」を「お読みになる」と尊敬語にした上で、更に尊敬語の「……れる」を加えたもので、二重敬語である。「二重敬語」は、一般に適切ではないとされている。ただし、語によっては、習慣として定着しているものもある。

[習慣として定着している二重敬語の例]

- ・お召し上がりになる、お見えになる
- ・お伺いする、お伺いいたす、お伺い申し上げる

## (5) 「敬語連結」とその適否

二つ（以上）の語をそれぞれ敬語にして、接続助詞「て」でつなげたものは、(4)でいう「二重敬語」ではない。このようなものを、ここでは「敬語連結」と呼ぶことにする。例えば、「お読みになっていらっしゃる」は、「読んでいる」の「読む」を「お読みになる」に、「いる」を「いらっしゃる」にしてつなげたものである。つまり、「読む」「いる」という二つの語をそれぞれ別々に敬語（この場合は尊敬語）にしてつなげたものなので、「二重敬語」には該当せず、「敬語連結」に該当する。

「敬語連結」は、多少の冗長感が生じる場合もあるが、個々の敬語の使い方が適切であり、かつ、敬語同士の結び付きに意味的な不合理がない限りは、基本的に許容されるものである。

### 〔許容される敬語連結の例〕

- ・お読みになっていらっしゃる
- ・お読みになってくださる（「読んでくれる」の「読む」「くれる」をそれぞれ別々に尊敬語にしたものである。）
- ・お読みになっていただく（「読んでもらう」の「読む」を尊敬語に、「もらう」を謙譲語にしたもの。尊敬語と謙譲語の連結であるが、立てる対象が一致しているので、意味的に不合理はなく、許容される。）
- ・御案内してさしあげる（「案内してあげる」の「案内する」「あげる」をそれぞれ別々に謙譲語にしたものである。）

### 〔不適切な敬語連結の例〕

- ・伺ってくださる・伺っていただく（例えば「先生は私の家に伺ってくださった」「先生に私の家に伺っていただいた」は、「先生が私の家を訪ねる」ことを謙譲語「伺う」で述べている点が不適切であり、結果として「伺ってくださる」あるいは「伺っていただく」全体も不適切である。（注））
- ・御案内してくださる・御案内していただく（例えば「先生は私を御案内してくださった」「私は先生に御案内していただいた」は、「先生が私を案内する」ことを謙譲語「御案内する」で述べている点が不適切であり、結果として「御案内してくださる」あるいは「御案内していただく」全体も不適切である。「して」を削除して「御案内くださる」「御案内いただく」とすれば、全体として一つの適切な敬語となる。（注））

（注）「伺ってくださる」が使える場合もあること。未執筆

## (6) 形容詞の……

（未執筆）

### 3 敬語を使う上での留意事項

各種の敬語を使う上で留意すべき主な点として、次の各点がある。

(1) 相手側は立て、自分側は立てないことが基本である。

(説明文未執筆)

(2) 上記(1)の「相手側」には「相手」だけではなく、「相手に近い(相手にとって「ウチ」と映る)人物」も含めて、また「自分側」には「自分」だけではなく、「自分に近い(自分にとって「ウチ」と認識すべき)人物」も含めて考えるものとする。

(説明文未執筆)